



留学生との協働による小学校外国語の授業開発と実践：児童・留学生・学生の学びに着目して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学 公開日: 2024-08-22 キーワード: 作成者: 石森, 広美 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/0002000263

留学生との協働による小学校外国語の授業開発と実践

— 児童・留学生・学生の学びに着目して —

石 森 広 美

北海道教育大学函館校地域教育専攻（英語科教育・国際理解教育）

Development and Implementation of Elementary School Foreign Language Classes in Collaboration with International Students : Focusing on the Learning of Pupils, International Students, and University Students

ISHIMORI Hiromi

Department of Regional Education, Hakodate Campus, Hokkaido University of Education

概 要

本稿は、留学生との協働による小学校外国語の授業開発と実践が、授業を受ける児童、授業を提供する留学生と教職課程の学生にどのような学びをもたらすのかについての探究である。留学生との交流を通じた外国語の授業が、児童の学習意欲や異文化への関心向上にどのように寄与したのかに焦点を当て、同時に留学生と学生の学びも明らかにすることを目的とした。小学校5学年において留学生と学生が協働して授業実践した結果、97.9%の児童が外国語学習への意欲向上を示し、100%の児童が異文化に対する興味を高めたことが示された。また、留学生にとっては自国理解の深化と自尊感情の向上が促進され、他方で学生は異文化理解が深まると同時に、外国語の授業構想力や指導技術の向上など、教職において有用な成果が得られた。これらの総合的な効果から、留学生との協働による小学校外国語の授業は、児童、留学生、教職課程学生にとって有益であることが示唆された。

1. はじめに

1.1 課題意識

本稿は、留学生との協働による小学校外国語の授業開発と実践が、授業を受ける児童に学習意欲や異文化への関心向上に寄与し得るのか、また授業を提供する留学生と教職課程の学生にいかなる学びをもたらすのかについて探究し、小学校外国語教育への実践的示唆を得るものである。

急速に進展するグローバル化への対応策の一つとして小学校外国語が「教科」として導入され（文部科学

省, 2016), 4年が経過しようとしている(2023年度末時点)。日本においては, 多言語・多文化状況にある欧州等とは異なり, 外国語や異文化に日常的に触れる機会は, 他国と比して少ない。しかし, 外国語は現代社会で必須とされており、『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説外国語活動・外国語編』においても, 「グローバル化が急速に進展する中で, 外国語によるコミュニケーション能力は, これまでのように一部の業種や職種だけでなく, 生涯にわたる様々な場面で必要とされることが想定され, その能力の向上が課題となっている。」(pp.62-63)と記載されている。2011(平成23)年度から高学年において導入された外国語活動の充実により, 児童の高い学習意欲や中学生の外国語教育に対する積極性の向上といった一定の成果が認められていることは確認されているものの(文部科学省, 2017), 外国語使用の必然性が低い日本において, 児童生徒が外国語学習の意義を見出し, 学習意欲や外国語を使用して積極的にコミュニケーションを図ろうとする姿勢が育まれるような, 質の高い外国語教育のあり方が模索される。

外国語教育を行う上で「必然性」が鍵となることは明白であるが, その必然性を高めるためには, コミュニケーションを行う目的や場面, 状況の設定が不可欠となる。小学校外国語科の目標は, 「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ, 外国語による聞くこと, 読むこと, 話すこと, 書くことと言語活動を通して, コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力」の育成である(文部科学省, 2017, p.67)。中学年の「外国語活動」にも高学年の「外国語」にも共通して, 学習指導要領には「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」という表現が数次にわたって登場する。これは「外国語で表現し伝え合うため, 外国語やその背景にある文化を, 社会や世界, 他者との関わりに着目して捉え, コミュニケーションを行う目的や場面, 状況等に応じて, 情報を整理しながら考えなどを形成し, 再構築すること」と説明されている(文部科学省, 2017, p.67)。英語を使用しなければならない, あるいは, 英語を使用してコミュニケーションを図りたい, と感じられる場面や状況等を授業において意図的に設定し, 自分のことばでやり取りをする学習体験を創出することが有効であると理解できる。

また, 外国語教育は言語の習得だけではなく, 文化認識を深めることも密接不可分な関係にあり(Gashi, 2021), 多様な「他者」や「相手」とのコミュニケーションを通して, 文化や価値観を学ぶことも重要である(Barany, 2011)。小学校で外国語専科を務めた東(2023)は, グローバル時代に生きる子どもたちの未来を展望した際, 小学校外国語教育で求められる「コミュニケーション能力」の育成においても, グローバルな視点で理解や思考を深めることの必要性を主張している。2020年の教科化以降, 小学校外国語教育が異文化への寛容な態度の育成から, 徐々に運用能力の向上に力点が移行しているという指摘があるなか(寺沢, 2021), 特に小学校段階においては, 外国語によるコミュニケーションの土台となる多様性や他者理解, 寛容性の育成という側面も重視すべきであろう。他方, 外国語教育は学校教育のみで担いきれるものではなく, 外国語を日常的に使用しない社会環境においては, 一人一人が外国語学習への意欲を高め, 自律した学習者として生涯にわたって学び続けることが必要であり, 外国語教育の入り口を担う小学校外国語教育において, 外国語をもっと知りたい, 学びたいと思う意欲の向上に資する授業設計が求められる。本稿は, こうした課題意識に基づくものである。

1.2 先行研究の検討と本稿の目的

「外国語」によるコミュニケーションは, 日本語を母語とする者同士で行うより, 異なる言語や文化背景を有する相手と行う方が理想的であり, 必然性が高いことは疑念の余地がないだろう。外国語教育に留学生との交流を組み入れた先行研究には, 事例の蓄積もみられる。例えば, 中村・阿部・青柳・大里・荻原・沢井・林(2021, 2022)の研究では, 6年生の児童が数次にわたる留学生の交流を通して, 言語表現への慣れ親しみや主体的に学ぶ姿勢だけでなく, 相互文化的コミュニケーションに関する気づきや, 相手文化への好

奇心の高まり、自身がもっていたステレオタイプ的な先入観に気づくなど内面的な変化に到るまで、多様な学びがあったことを明らかにしている。加えて、英語に苦手意識をもつ児童にとって、英語でコミュニケーションをする楽しさや英語でコミュニケーションをしてみたいと思える機会となったことを報告し、交流経験が英語の言語能力の学習以上に、英語学習への前向きな態度を培うことができた結果から、留学生との交流活動を行う価値や意義を見出している。

また、留学生との交流や国際交流をICTの活用と接合させた授業実践も散見される。米倉（2017）は、5年生の外国語において、ICTを活用した留学生交流会をゴールとした単元を開発し一連の授業実践をした結果、相手意識をもって活動に取り組む児童の姿や、主体的に学習課題に臨む姿勢が確認されたことを報告している。また、小林・古屋・中川（2021）も、6年生の外国語の授業で2か月間ビデオ通話を活用した国際交流の授業実践を行った結果、児童の主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度や外国語学習への興味関心の向上にも好影響があったと述べている。同様に、岡・渡辺・阪東・長野・石坂（2021）の実践研究においても、6年生の外国語の授業において13時間の単元計画を立て、その中にオンライン会議システムを活用した留学生との交流を位置づけ、英語によるコミュニケーションを図る必然性を感じられる言語活動に取り組ませたところ、学習の振り返りの記述の共起ネットワーク分析の結果、児童は既有的知識・技能を用いながら意欲的にコミュニケーションを図るとともに、異文化に対する興味・関心を抱く等、異文化理解に対する素地を育成できたとの成果を述べている。一方で、自己紹介のみに終始し地域の魅力発信等の交流活動に発展しにくかった点がみられたことや、オンラインで留学生に自己紹介をする活動に疑問をもった児童がいたこと、あるいはオンラインに起因する諸課題、すなわちコミュニケーションを図る上で重要な非言語的情報が伝わりにくいと感じるデメリットがあった点も言及されている。これらを踏まえると、児童に納得感を醸成し、教科書に準拠した年間計画に立脚した授業構想の必要性と、児童が英語を使って当該活動を行う必然性と外国語学習の意義を感じられる交流活動の設定が重要であると確認される。

先行研究の検討から、留学生との交流をはじめとする国際交流を取り入れた授業の継続は、児童の外国語学習への意欲や関心の向上に資することがわかる。しかし、ただ留学生を活用すればよいというわけではなく、年間を通した学習予定や単元計画に基づきながら、外国語を使う必然性や楽しさを児童に感じさせる工夫が求められる。また、先行研究においては、留学生を「活用」した児童の学びは描画されているものの、授業に貢献する留学生側が提示した具体的資料や留学生が授業設計に参画する様相、あるいは活動を通して成長する留学生側の学びは描かれていない。実際に、留学生からどのような情報が引き出されて授業計画が立案され、展開されたのか。そこに教職課程の学生が関与した場合、どのような相乗効果が生まれたのか。これまであまり表面化しなかった授業づくりのプロセスにも焦点を当てることにより、児童の学習意欲の向上に有効な諸点を見出すことができると推測される。

以上のことを踏まえ、本稿では、小学校教員養成課程の英語科教育のゼミ生が、留学生と協働して取り組んだ小学校外国語（英語）の授業開発と実践を省察し、児童の学びの概要に加えて、学生と留学生の学びにも視線を向け、上記課題を探究していく。限定的機会ではあったものの、対面での留学生との交流を通じた外国語の授業が、児童の学習意欲や異文化への関心向上にプラスの作用をもたらしたのか、また留学生と教員養成課程学生の協働的な授業づくりと授業実践によって、双方にいかなる学びが生じたのかを、児童の意識調査と学生・留学生への振り返りシートから、明らかにすることを目的とする。一般的に、留学生は国際理解教育や外国語活動等の人材として学校等に派遣され、当該学校の教員に「活用」されることがほとんどであるが、本実践では留学生が自らの考えや経験を表現し、学生と意見交換を重ねながら、授業づくりに主体的に参画している点が新規的である。

なお、「外国語」の選択にあたっては、文部科学省（2017）は「外国語による聞くこと、話すことの言語

活動を行う際は、英語を取り扱うことを原則とする」「外国語科においては、英語を履修させることを原則とする」と定めており、事実上、日本における外国語活動・外国語教育は英語教育を意味する。しかし、本来「外国語」は英語に限定されるものではなく、グローバル化が進展する多文化共生社会において、多様な言語や文化に接して言語への気づきを喚起し、文化的多様性への感覚を初等教育段階から養成することは極めて重要であることを記しておきたい。この点を念頭に置きつつも、本稿では、現実的文脈からの実践概要と実践内実の検討においては、より事実を明確にするために、「英語」の授業と表記することとする。

1.3 研究対象と研究方法

本研究では事例として、留学生と教職課程で学ぶ学生が協働して開発した授業を、2023（令和5）年度7月に北海道（函館市）の公立小学校（以下、A校）第5学年2クラス、合計49名の児童を対象に実践した英語の授業実践を取り上げ、事例調査（質的調査）の方法で検討を行う。

授業はクラス毎にそれぞれ1時限行い、同じ留学生と学生が同日2時限連続で担当した。本稿では、留学生と学生が協働で作った授業案を提示しつつ、①授業を受けた児童の学び、②日本の小学校英語の授業開発と実践に従事した留学生の学び、③留学生と共に授業開発と実践に従事した学生の学び、を検討の対象とする。

具体的な方法としては、①児童へのアンケート（Googleフォーム活用）、②留学生からのフィードバック、③学生からのフィードバック、により多角的データを収集・分析する。これらの方法を通じて得られたデータを現実の中で解釈し、それぞれの立場の特徴的な事象の捉え方や認識、成果を探る。本プロジェクトに関わったのは、小学校教職課程の学生（3年生）7名に加え、小学校での出前授業に関心を示し協力を志願した留学生5名であり、留学生の出身地は台湾1名、ベトナム1名、マレーシア2名、英国1名の計4か国5名である。

2. 小学校5学年の英語の授業構想と実践

2.1 留学生の文化背景を活かした授業構想

まず、授業構想にあたっては、出前授業を予定していた時期に児童が学校で学習していた教科書の単元を踏まえ、既習事項を確認した上で、実践する授業が学校側で策定した年間計画から逸脱しないよう配慮することとした。

6月中旬から下旬にかけて、A校の5年生は『NEW HORIZON Elementary English course 5』Unit 3 What do you want to study? を学習した。この単元では、自分のことを伝えたり、相手のことをよく知るために、学びたい教科やなりたい職業などについて、短い話を聞いてその概要が分ったり、伝え合ったり、話したりすることができるようになること、また、外国語の背景にある文化に対する理解を深めることが目標とされている（東京書籍株式会社、2021）。言語材料としては、What do you want to study? I want to study～. What do you have on ～? I have ～. What do you want to be? I want to be a ～. 等が挙げられている。そこで、留学生と学生による出前授業では、既習事項を使用した発展的活動として、留学生の学びたい教科や好きな教科を聞き取ったり、また自分の学びたい教科や好きな教科を留学生に伝えて、やり取りをしたりする言語活動を設定することにした。

児童は本単元において、自分の好みや自分のクラスの時間割等に基づいて、例えば、What do you want to study? I want to study math. や、What do you have on Monday? I have music on Monday. などのように、目標表現を用いた言語活動を展開してきたと推察される。この単元で扱う話題と言語表現を活かした言語活動に、留学生自身が保有する文化や経験を含めることにより、児童は目の前の留学生から本物の情

報を聞くことができ、既習事項を活用しながらオーセンティックなコミュニケーション活動を展開することが可能となる。そのことにより、目標となる言語表現の定着のみならず、上述の単元目標の一つである「外国語の背景にある文化に対する理解を深めること」にもアプローチすることができ、異文化理解を深めることにも貢献できる。

そこで、学生は留学生に対し、留学生の出身国の小学校の時間割を用いた言語活動を準備するために、授業準備会では留学生に質問をしながらコミュニケーションを重ね、必要な情報を引き出していった。A校で使用されている英語教科書を広げ、単元に記載されている日本の小学校の時間割例を説明しながら、例えば、留学生の出身国（地）の小学校ではどのような教科・科目（授業）があったか、日本と異なる科目や似ている科目があるか、それはどのような内容を学ぶ授業なのか、登校時間や下校時間、心に残っている学校行事や面白いと思う学校行事は何か、日本の子どもたちに教えたいことは何か、等である。留学生との交流を通じた授業準備会を重ねた結果、オリジナルの教材（留学生提供による情報に依拠した各国時間割とワークシート、資料参照）および学習指導案（表1）を完成させた。各国の時間割とワークシートはカラー印刷（A3サイズ）をし、児童に配付した。

[表1] 学習指導案（略案）

第5学年 外国語科 学習指導案

1. 教材名 NHE Unit 3 What do you want to study?
2. 本時の目標
 - ・既習の英語表現を使ってコミュニケーションを行うことができる。
 - ・世界の様々な授業や学校行事などについて考え、世界と日本の文化に対する理解を深める。
 - ・留学生との交流を通して、異文化への関心を高め、英語の学習動機の向上につなげる。
3. 本時の展開

	○学習活動	★教師の支援 ●留意点 ◇評価
導入 5分	○グループ分け 教師がワークシートを配り、シート内の国を基にそれぞれグループに分かれてまとまる。 ○留学生の自己紹介	★児童が各国の「こんにちは」を聞くだけではなく、声に出して言うように促す。 ●留学生の話す多様な言語にふれ、児童の興味を引き出す。 ★What's your name? Where are you from? を、児童が留学生に問いかけることで留学生との交流の機会を増やし、また児童の英語を使用する機会を増やすことにつなげる。
展開 35分	○活動の説明と使用する英語表現の確認（5分） What do you want to study? I want to study... What subject do you like? I like.... の復習と練習 ○グループワーク（20分） グループ（4カ国）に分かれて、児童が英語を使って留学生にインタビューし、日本とその国の共通点・相違点についてワークシートにまとめる。 （台湾、ベトナム、マレーシア、英国） ○発表・質問タイム（10分） 留学生と交流して、児童がいちばん興味をもったことや友達に紹介したいと思った部分を発表する。それに対して、他のグループの児童が質問する。	★教科書も使用し、既習事項であることを児童に認識させる。 ★重要な英語表現を黒板に貼り、繰り返し見られるようにする。 ★ヒントカードを黒板に示し、児童が留学生に英語でインタビューする際の手助けの1つとする。 ★すべての児童が留学生とコミュニケーションをとれるように各班の学生が支援する。 ★児童がうまく英語で言えないときは日本語を使っても大丈夫であることを伝える。必要に応じて、学生が英語にするのを補助する。 （◇観察） ★聞き手の児童には、終わったら拍手をするよう促す。発表する児童には、Good job! Thank you! など、声をかけて達成感をもてるようにする。（◇フィードバック） ●ワークシートは児童の異文化理解の資料となるので回収しない。
まとめ 5分	○まとめ 本時の活動を振り返る。 ○Googleフォームに授業の振り返りと感想を記入（アンケート）	★児童の良かったところを褒める。（◇フィードバック） ★本時の学習を振り返らせ、内容を理解できているか確認する。 ●Googleフォームによるアンケートは担任から協力を得る。（◇振り返りによる自己評価）

（出典）ゼミ生が原案作成の後、筆者が加筆修正

2.2 オーセンティシティと「本物」との出会いを伴ったコミュニケーション活動の実践

実践では最初に、当該授業で使用する既習表現を復習した後、児童の言語と文化への興味を喚起するために、留学生は母国語であいさつをし、児童がそれを声に出すことから開始された。「ニーハオ!」「スラムマッパギ!」「シンチャオ!」と平素は聞きなれない音声に児童は好奇心旺盛に反応する。その後、学級全体で What's your name? Where are you from? と留学生に英語で問いかけ、留学生は英語で答える。ここには、出身国が異なっても、英語が共通言語として機能することを実感として認識させる意図がある。

次に、What do you want to study? I want to study..... What subject do you like? I like..... What subject do you study in....? 等の表現の確認と練習を行った後、授業の中核をなす「展開」部分のグループワークへと移行する。机の配置をグループ型に変換し、児童は留学生の出身地である4か国、4グループに分かれた。児童5,6人から構成される1グループに、留学生1名とサポート役となる学生1,2名が加わり、国ごとに配付されたワークシートを使用しながら、コミュニケーション活動が展開された。目の前にいる留学生が自分の国の時間割について英語で簡単に紹介するところから、グループ活動が開始した。

[表2] やり取りの一場面（授業観察から）

児童（グループで）：What subject do you study in Malaysia?
マレーシア留学生：（日本にはない科目を意図的に選択して）I study Islamic education, Malay and Arabic.
学生：（配布資料の時間割を指さしながら）今、聞こえた科目に○をつけてごらん。
「イスラミック」って聞こえたね。イスラミックって何のことかわかる？
児童：イスラム教！
マレーシア留学生：That's right!
学生：そう！よくわかったね。イスラム教のことを勉強する科目なんだね。「道德」って何ていうか覚えてる？
児童：Moral Education.
学生：そうだね！Education ってつくよね。
マレーシア留学生：Islamic educationはマレーシアでは日本のMoral Educationみたいな感じかな。
学生：マレーシアでは多くの人がイスラム教を信じているからだね。他には聞きたいことある？
児童（グループで）：（配布資料の時間割にあるMalayを指さしながら）What's this?
マレーシア留学生：Malay is our language. You study Japanese, we study Malay.
児童：あ、国語みたいな感じ？
学生：そうだね！マレーシアの国語はマレー語だね。もっと英語を使って聞いてみよう。
児童：Do you have music in Malaysia?
マレーシア留学生：Yes, we have music.
（中略）
マレーシア留学生：（マレーシアの時間割を指さしながら、児童に向かって）What do you want to study?
児童：I want to study P.E.
児童：I want to study Islamic education.
（以下、省略）

児童は教科名や本時の英語表現を使用して留学生に質問をし、聞き取りながら配布資料に印を付したり、記録したりしていく。そして、疑問や興味をもった点について、日本人学生に聞いたり、留学生と話したりして理解を深めていった。次に、時間割や教科名に関する一連の活動の後に、留学生は授業のために準備した出身地の学校教育に関する写真等を児童に示しながら、各国の特徴的な学校行事などについて紹介していく。この時点では、児童の発達段階を鑑みて、主として日本語が使用された。児童は留学生の話を注意深く聞きながら、入手した情報をワークシートに記入していった。

このような異文化理解や国際理解の要素を含む英語の授業展開に際しては、しばしばインプットの内容や言語使用について問題視される（阿部，2020 ほか）。この点に関しては、「理解可能なインプット」として“i + 1（アイ・プラス・ワン）”すなわち、現状のレベルよりやや高いレベルのインプットの有効性が広く知られており（Krashen, 1985；村野井，2006 ほか）、学習の目標設定にも応用されているが、英語によ

る指示・情報提示（インプット）がそれを大きく飛躍した際はむしろ逆効果になることが懸念される。一方で、日本語による説明や解説が大半を占めれば、それは英語コミュニケーション能力の育成という目標の本義からは乖離してしまう。したがって、授業のねらいに即し、バランスよく英語と日本語を戦略的に使い分けることが重要となる。そのためには、使わせたい言語表現を明確化した上で、理解可能なインプットを意識する必要がある。こうしたインプットの留意点に加えて、言語使用についても配慮しておきたい。当該授業においては、留学生との交流を通して、児童は既習事項を活用して英語によるコミュニケーションを図り、留学生から外国語の生の情報を入手し、教科名など聞き取れた単語によって意思疎通ができた喜びを体感できると予測される。さらには、世界と日本の文化に対する理解を深め異文化への扉を開くことを目指している。したがって、授業のねらいに対応した言語使用に留意する必要がある。

展開部分最後の発表では、各グループの代表児童が前に進み、留学生との交流を通じて得た情報をクラス全体に紹介し、学びを共有した（図1）。授業終了時には留学生全員が再び前に進み、手を振りながら児童に別れを告げ、本授業は完了した（図2）。



【図1】 グループ活動で分かったことを児童が発表する場面



【図2】 児童に手を振る留学生

3. 授業実践の成果と考察

3.1 児童の学び

授業終了後、児童の学びや意識を探索するために、学級担任の協力を得て、匿名性が確保され成績等には一切影響を与えない旨を説明した上で、以下のような簡単なアンケートを実施した。授業に参加した2クラス合計49名全員から回答を得た。

【表3】 児童へのアンケート項目（Googleフォーム使用）

1. 留学生との交流を通してもっと英語を学びたいと思いましたか？
2. 留学生との活動を通して外国の文化についてもっと知りたいと思いましたか？
3. 留学生とまた交流したいですか？
4. 今日の授業を受けた感想や気づいたことを自由に書いてください。

質問1, 2, 3については、評定尺度（間隔尺度）を用いて [とてもそう思う・少しそう思う・あまりそう思わない・まったくそう思わない] の4件法とし、質問4については自由記述式とした。結果は以下（表4）の通りである。

[表4] 児童のアンケート結果

1. 留学生との交流を通してもっと英語を学びたいと思えましたか？ *小数点以下1桁(0.1%単位)で四捨五入(以下同様)

	度数(人)	相対度数(%)	累積相対度数(%)
とてもそう思う	42	85.7	85.7
少しそう思う	6	12.2	97.9
あまりそう思わない	1	2.0	99.9
全くそう思わない	0	0	
合計	49	99.9	

注：相対度数が100%にならないのは、四捨五入の影響による。

2. 留学生との活動を通して外国の文化についてもっと知りたいと思えましたか？

	度数(人)	相対度数(%)	累積相対度数(%)
とてもそう思う	46	93.9	93.9
少しそう思う	3	6.1	100
あまりそう思わない	0	0	
全くそう思わない	0	0	
合計	49	100	

3. 留学生とまた交流したいですか？

	度数(人)	相対度数(%)	累積相対度数(%)
とてもそう思う	49	100	100
少しそう思う	0	0	
あまりそう思わない	0	0	
全くそう思わない	0	0	
合計	49	100	

結果を概観すると、留学生との交流・活動は、英語学習への動機向上にも有効に作用することがわかる。「英語を学びたいと思えましたか」の質問に対して、「とてもそう思う」が85.7%を占め、「少しそう思う」と合わせると97.9%に上った。実際には、留学生は日本語でコミュニケーションをとることが可能であり、活動の後半では児童に日本語を使いながら母国の学校行事などを紹介する場面が中心であったにもかかわらず、児童は前半の英語を用いた時間割等の言語活動を通して、英語を学習すればもっと充実したコミュニケーションが図られるのではないかと期待したと推論される。高学年に進むにつれ、英語に対する嫌悪感や苦手意識を抱く児童が増加傾向にあることが指摘されており、現行の学習指導要領において中学年から外国語(英語)活動が導入されたことで、英語嫌いの児童が増加するという予測に懸念が示されている(産経ニュース, 2017)。この点を鑑みると、今回の授業実践が児童の英語学習に対する意欲を刺激し、前向きな気持ちを誘引した可能性が考えられる。

加えて、留学生との対面による活動を通して、異文化への興味関心が刺激され、「外国の文化についてもっと知りたいと思えましたか」という質問に対しては、「とてもそう思う」が93.9%を占め、「少しそう思う」と合わせると100%に達した。小学校学習指導要領・外国語科の「学びに向かう力、人間性等」に関わる目標には、「外国語の背景にある文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う」と明記されており(文部科学省, 2017, p.72)、異文化への関心を高めることも大切な目的の一つであると明示されていることから、留学生との交流を通して外国語(英語)を用いたコミュニケーション活動を展開した本授業実践は、この目標にも符号する。

さらに注目すべきは、質問項目3「留学生とまた交流したいですか」の回答結果である。これには、全児

児童（100%）が「とてもそう思う」と回答した。実際の観察においても、出前授業を終えて教室を去る際、児童からは「もっとやりたい」「また来てほしい」との声があがった。一般的に高学年になると児童の関心事は多様化する傾向にあるといわれ、学力面においても英語学習や異文化への関心についても、差異が生じ始める。発達段階に応じて、徐々に好みや嫌悪、得意不得意等が形成されていくが、本授業実践においては、児童の留学生との交流への関心の高さがうかがえる結果となった。もちろん、非日常感もたらす心理が少なからず作用している可能性を念頭に置くべきではあるが、アンケート結果から得られた上記の児童の認識に基づき総合的に判断すれば、異文化理解へのアプローチから児童の英語学習への意欲喚起へと接続する有効性が示唆されたということ是可以する。

ここで、児童の学びの内実を把握するために、補足資料として、児童の自由記述内容の特色をみてみたい。授業終了後の短時間におけるノートパソコンでの文章入力であったことから、各自一言程度の記述であったため、文末表現に着目した。語尾の動詞の出現頻度を分析すると、上位を占めたのは「思う」21、「わかる」12、「知る」16、「学ぶ・習う」8、という結果であった。「～だと思った」「（～について）わかった／知れた／学んだ」の他に、「（～だと知って）驚いた／びっくりした」「楽しかった」等が主流であるなか、注目されたのは、「もっと知りたいと思った」と興味関心や意欲の向上について言及している児童が、49名中9名（全体の18.4%）いたことである（下線部は筆者による。以下同様）。とりわけ、「外国語をもっと学んで外国の人とすらすら話したいと思いました」（外国語学習への意欲向上）、「他国のことももっと知りたい」「もっと外国の学習をしたい」（異文化理解への意欲向上）等の知的欲求の向上は、小学校外国語の授業としての意義が投影されており、実践の成果の一端を表している。これが永続的な意欲となるかは断定できないものの、低下傾向に転じつつある高学年の外国語学習の意欲喚起につながる可能性は認識される。

3.2 留学生の学び

出前授業を終えて三日間以内に、参加した留学生5名から、①授業づくり・準備中の学び、②小学校での授業実践の学び、③全体を通しての気づき、についてのフィードバックを記述式ワークシートにより収集した。記述内容から鍵となる表現やキーワードを抽出し、カテゴリー化した結果、表5のようにまとめられる。この傍証となる具体的な記述を、以下に一部抜粋する。

〔表5〕 留学生の学びの分類

	鍵となる表現・キーワード	カテゴリー
① 授業づくり・準備中の学び	学生と協力、学生の優しさ、学生への感謝	学生との関係性への肯定的感情
	自国と日本の違い、自文化の振り返り	自国理解
② 小学校での授業実践の学び	初めて日本の小学校を訪問、驚き	貴重な経験
	楽しい、子どもたちがかわいい	心の充足感
③ 全体を通しての気づき	自己の振り返り、懐かしさ	自己省察
	自国への誇り、自国のことをもっと知りたい	自国理解

① 授業づくり・準備中の学び

- 私は英語も苦手で、日本語の表現もあまりうまくできません。しかし、ゼミの皆さんは真剣に私の話を聞いてくれて、私の考えを整理してくれました。本当に助かりました。（台湾留学生）
- It's a good opportunity to be able to learn about Malaysia and Japan's cultural differences in school. Because every member listened really well to my explanation even though they're unfamiliar about it, I felt really happy and thankful.（マレーシア留学生A）
- ゼミ生がとても優しいので、協力ができました。（マレーシア留学生B）

② 小学校での授業実践の学び

- 本当に楽しかった！小学生が間違いを恐れずに勇気をもって質問に答える姿を見ると、かわいいと思う一方で、自分自身がこのような積極的に発言する勇気を忘れかけていたように思います。台湾と日本の小学

校の違いに小学生だけでなく私も驚きました。日本の小学生が5年生で一人一台のパソコンを使い始めるとは、時代の進化を感じました。(台湾留学生)

- It was fun. The kids were very energetic and friendly. It's given me a different perspective of teaching and has definitely opened me up move to the idea of teaching in the future. It was also interesting to see how Japanese primary schools' work. (英国留学生)

③ 全体を通しての気づき

- 授業を通して、私は文化的アイデンティティについても気づき、自分の国を誇りに思いました。小学生に自分の国について紹介したとき、自分の国のことを世界中の人々に教えることができ、非常に誇りに思いました。(ベトナム留学生)
- この授業で、自分の小学生時代の記憶を振り返る機会になっただけでなく、台湾と日本の小学校教育の違いにも気づくことができました。小学生が自国の小学校をうらやましがっているのを見て、私も誇りを感じました。今回は本当にいい機会でした。(台湾留学生)
- Through this opportunity, I realized that there are so many things to be grateful for, regardless of the country you come from, because each country has its own unique specialties (school events). Thanks to this class, I managed to collect old photos and felt really nostalgic. (マレーシア留学生A)
- (授業を行うにあたって) マレーシアにはあって日本にはないことなど、いろいろなことを調べました。自国のこともまだまだたくさん知らないことがあるなと思ったけれど、少しでも教えられて良かったです。(マレーシア留学生B)

このように、留学生は、学生と協働で授業を考案するプロセスにより日本人学生との良好な関係を構築し、授業実践に臨むことができたとわかる。小学校での出前授業は留学生にとっても新鮮であり、日本の小学校について理解を深める好機になったようである。また、授業準備を含めた本活動全体を通して、留学生は自国の事情や文化等を日本の子どもたちに伝えようとする意欲が向上し、国の代表としての自覚や誇りを強くするとともに、自国・自文化理解が深まったことが看取できる。学校からの派遣依頼にただ受諾して学校訪問する従来の活動とは異なり、本授業実践に際しては、留学生各自の個性やアイデアが発揮される。事前に日本人学生と共に授業構想に参画し、主体的に意見や情報を提供しそれを反映させつつ、当該授業が協働で作り上げられた。そのプロセスにおいて自らの立場や役割を掌握したからこそ、省察につながる学びが生起したと考えられる。この経験によって獲得した感覚や気づきは、自己肯定感を向上させ、留学生生活を充実させることに寄与する可能性が示唆された。

3.3 学生の学び

他方、教職課程の学生の学びはいかなるものだったのだろうか。3.2同様に、①授業づくり・準備中の学び、②小学校での授業実践の学び、③全体を通しての気づき、の3点について、一連の活動に従事した学生7名から記述式ワークシートによりフィードバックを収集した。記述内容から鍵となる表現やキーワードを抽出し、カテゴリー化した結果、以下(表6)のようにまとめられる。

[表6] 学生の学びの分類

	鍵となる表現・キーワード	カテゴリー
① 授業づくり・準備中の学び	インターネットではわからない生の情報 自分たちの異文化理解・国際理解の深まり	(A) 異文化理解・国際理解
	日本語を母語としない人とのコミュニケーションの取り方	(B) 異文化コミュニケーション
	留学生との連携、役割分担	(C) 授業づくりの難しさ
② 小学校での授業実践の学び	(児童がわかる)簡単な英語に直す力が足りない 英語がとっさに出てこない	(D) 英語力不足
	児童へのサポートが不十分 留学生との会話のキャッチボールを促せなかった	(E) 指導技術不足
	児童が留学生と楽しそうに交流していた 児童が留学生に高い興味を示していた	(F) 児童の異文化理解への関心

③ 全体を通しての気づき	異文化や外国語コミュニケーションなど学びになった、今後の指導に活かせる	(G) 自分自身の学び・成長
	異文化理解の大切さ、自国理解の必要性	(H) 自国理解と異文化理解
	指導技術向上への意欲、準備の大切さ、児童の興味の引き方の工夫	(I) 授業実践の経験値

学生の学びは、(1) 国際理解・異文化理解の深まりや異文化コミュニケーション体験など学生自身の知識や経験の獲得、(2) 英語の授業づくりや実践、指導技術に関する学び、即ち指導者（授業実践者）側としての学び、の2領域に大別された。上記の傍証となる具体的な記述の一部を以下に示す（文末の(A)~(I)は、表6のカテゴリーに対応）。

① 授業づくり・準備中の学び

- 私自身、外国の学校生活について何も知らなかった。インターネットで調べるといくつか知ることができ、実際にその国の人にインタビューをして知ることでより詳しく知ることができた。また、学校生活で何をやっているかだけでなく、その人が体験した時に感じたことも知ることができた。日本にはない授業、行事など多くあった。またそれらは、その国の文化、背景から行われていた。それらを考えると外国についてさらに興味をもった。また、もっと知りたいと感じた。また、一つの国に複数人の留学生がいると、その国のなかでの違いも見つけることができた。(A)
- 留学生と一緒に授業を作っていくなかで、自分たち自身にも知らなかったことや新しい気づきが生まれて、国際理解にもつながった。(A)
- 留学生に母国のことを教えてもらう中で、日本との相違点を知ることができ学ぶことが多くあった。インターネットで調べる時とは違って、実際に体験してきたことを本人の口から聞くことは楽しかったし、更なる興味につながった。この「もっと知りたい」という気持ちを児童にも感じて欲しいと思った。(A)
- 自分自身も留学生とのコミュニケーションを経て、日本語を母語としない人とのコミュニケーションの取り方の難しさについて感じるようになった。(B)
- 授業の構成と留学生との連携について、もう少し細かいところまで事前に打ち合わせできればよかったと思う。特にグループ活動時に留学生と学生の連携がごたついた場面があった。(C)
- 留学生との入念な打ち合わせが必要であると考えた。日本人の学生は日本の小学校についてよく知っていて、日本人小学生の特徴や傾向も理解している。しかし、留学生は日本の小学校に行くことが初めであるのに加え、どこまで介入し、どのように学生と連携を取るのかを十分に情報共有しないまま進めてしまった。(C)

② 小学校での授業実践の学び

- 日本語で補足する前にこちらで簡単な英語に言い換えることができれば英語の学習となりよかったと思うが、うまくできなかった。簡単な英語に言い換える力が圧倒的に不足していると実感した。(D)
- 授業を実際にやってみて、緊張したり頭がいっぱいになると、外国語の授業なのに日本語をついで使ってしまうということに気が付きました。Please open your textbook. やRepeat after me. などもっと英語を積極的に使っていかねばならないと感じました。(D)
- 授業のなかに英語を瞬時に臨機応変に取り入れることの難しさを学んだ。(D)
- グループ活動時にも効果的な声掛けや支援を行うのは容易ではなく、これも実践を積んでいかねば身につけることができないと感じた。(E)
- 児童と留学生がもっと関われるように働きかけられればよかった。児童が英語で質問し、留学生が英語で答えて、私が日本語で補足・解説するという流ればかりで、児童と留学生同士の交流、会話のキャッチボールを促すことができなかった。(E)
- 児童がどのような発言をするのか、どのようなことが想定されるのかの予想が未熟であった。例えば、児童によって興味を持つ部分は異なるため、その都度どう対応していくかを考える必要がある。(E)
- 子どもの英語の知識の差や、留学生の話す英語の訛りの差などから、グループによって活動の進行具合がかなり違ったように思えました。(E)
- 児童は、日本にないことを知ることがとても楽しそうだった。そのため、異文化理解の授業は楽しく学ぶことができると思った。もっと、異文化理解に関する授業を行うことで、楽しく世界について知ることができたり、外国の人とコミュニケーションを取ることができると考えられる。(F)
- 興味をもって楽しんでくれて、積極的に学ぼうとしてくれている子が多く、充実した時間でした。実際に留学生と会って、話ができただけで、子どもたちにとって遠くにあった国が身近なものになったからこその結果だと思いました。また、「日本と同じ教科もあるんだなあ。」とつぶやいている子がいました。日本との違いはインパクトがあり、興味を引きます。それだけではなく、日本との共通点に気がつくことも異文化を理解することに繋がると学びました。(F)

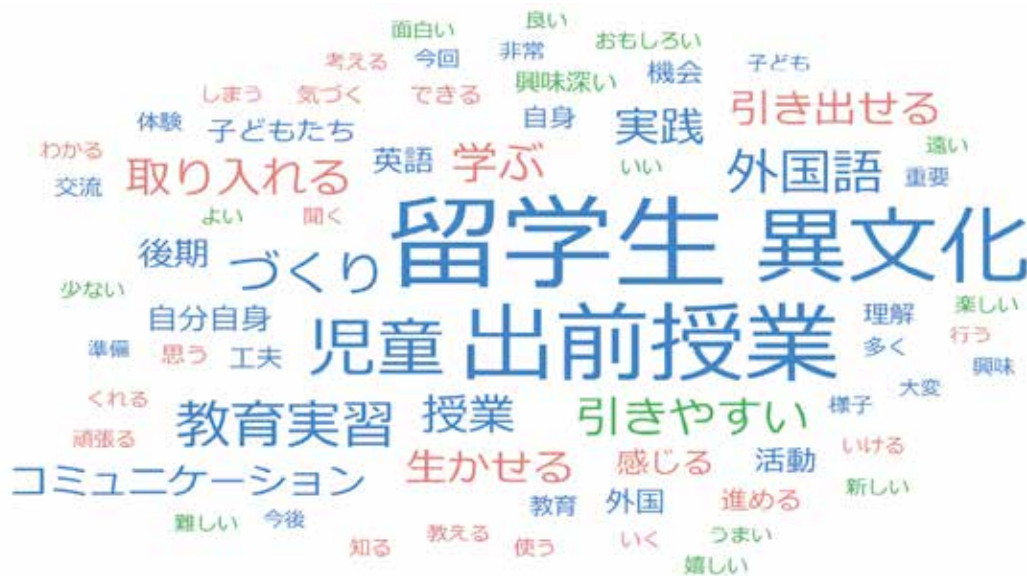
③ 全体を通しての気づき

- 授業づくりをする上で、自分自身も外国の様子や、コミュニケーションの仕方等、様々なことが学べ、とても良い機会となった。今後もこのような学びのチャンスを逃すことなく、精進していきたいと改めて感じるとともに、今回の活動を教育実習の外国語授業実践や後期の出前授業、さらにはチューターの活動にもつなげ、より多くの実践経験を積んでいきたい。(G)
- この活動を通して、小学生のうちから留学生とふれあって、異文化理解を深める機会があることは、とても

貴重なことだと感じた。こういう機会を通じて、異文化理解について面白いと思ってくれる人や、興味深いと思ってくれる人が少しでも増えてくれるといいなと思った。(H)

- 留学生は自身の国についてしっかり教えてくれたが、自分はあまり日本について知らないため、日本はどう？などと聞かれてもしっかりと答えることができなかった。やはり、相手について聞きたいときは自分のことも説明できるようにしておくことが重要だと改めて思った。(H)
- 留学生を目の前にして興味津々である雰囲気を感じられたので、その気持ちを生かせるような授業を作りたいと感じた。異文化理解を交えた英語の授業づくりのプロセスを一通り体験することができたので、今後の教育実習や後期の出前授業、現場に出るからの指導で生かしていきたい。(I)
- 子どもたちが、「もっと英語を使いたい！」と思ってくれるような授業を作りたいと思いました。教師自身が積極的に英語を使って授業をするだけでなく、コミュニケーションの道具の1つとして英語があって、伝わりやすい！と教えられる技術や工夫が大切だとわかりました。今後の授業づくりや教育実習など、自分自身の経験値を高め、伝えることの楽しさをたくさん感じたいと思いました。(I)
- 今回の授業で何が児童の興味を引きやすいかを学ぶことができ、授業実践のイメージができた。児童自身に「気づかせる」発問が非常に難しいと考える。「教える」のではなく気づかせることは、児童が考えて答えを導くことになるため、その言葉がけは非常に重要である。(I)
- 学習内容を教科書だけで学ぶのではなく、コミュニケーションを通して学ぶことが児童たちにとって良いと思った。実際に外国の人に英語で尋ねることで、知りたいことが知れるという達成感も味わえたのではないと思う。将来教員になったら、児童が外国の人とコミュニケーションを取る機会を多く作りたいと思った。実際に会話することで、外国語を学ぶ意欲につながると感じた。(I)

以上のように、学生はこの一連の活動を通して、授業づくりや実践には自己自身の英語の力や異文化理解の知識は必要不可欠であることを再認識した上で、質の高い英語と異文化理解の授業のあり方、そして授業実践の技術等に関する様々な気づきを得たことがわかる。この点は、下記のワードクラウドによっても裏付けられる。



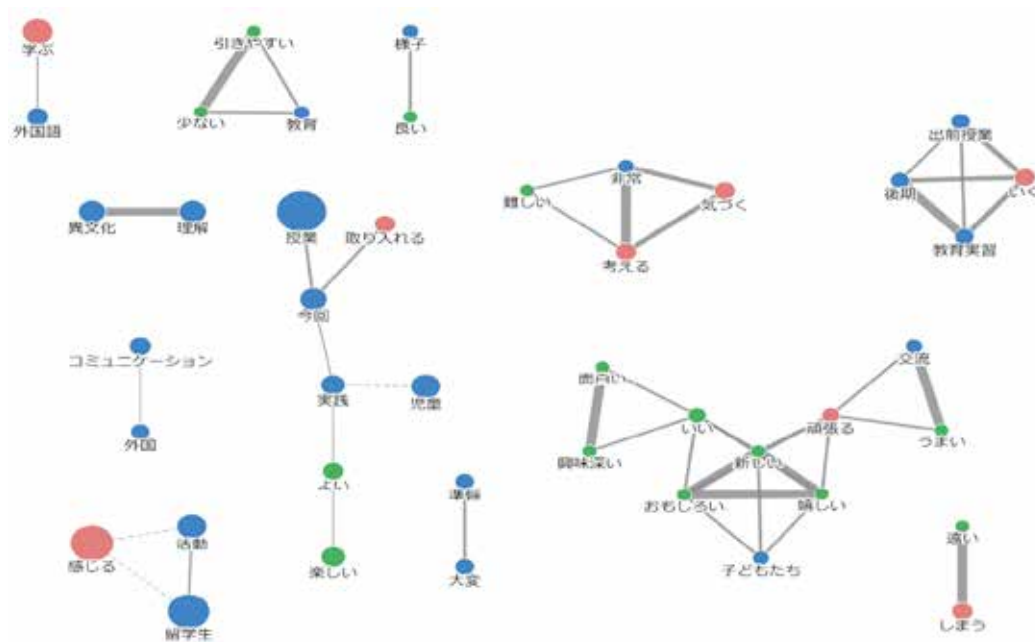
【図3】 振り返りシートの記述のテキストマイニングによる分析（ワードクラウド）

※ユーザーローカルAIテキストマイニングによる分析 (<https://textmining.userlocal.jp/>)

図3は振り返りシートの「③全体を通しての気づき」に記された学生の記述を分析したものである。テキストマイニングによってスコアが高い単語を複数選び出し、その値に応じた大きさで図示したワードクラウドを示すことにより、定性的データを可視化しその特徴を抽出している。スコアは出現回数だけでなく重要度を加味した値であり、文章における特色を表出している。例えば、「異文化」の出現回数は6に対し、「英語」は7であり、「英語」の方が回数は多いが、特徴語を抽出するための統計処理が施された結果が示されている¹。

最初に目を引くのは「留学生」（出現回数は12、「授業」の15に続いて2番目に多い）であり、本実践の特徴を表現している。そして図3からは、留学生との交流を通じた英語の出前授業を行ったことにより、児童の異文化や英語学習への関心・意欲を引き出すことにつながった、という実践の総括的骨子が抽出できる。また「コミュニケーション」に関する気づきも重要な位置づけを占めており、英語授業の中核を捉えている。

加えて、ここで注目されるのが、「教育実習」や「生かされる」「取り入れる」といった、教職課程学生としての今後の授業実践や活動に関するワードである。ここには、教員を目指す学生の次なる学びへの肯定的な姿勢、前向きな意欲や意思が表明されている。したがって、留学生と協働した小学校外国語（英語）の授業づくりと実践活動は、学生にとって単なる国際交流活動ではなく、教職課程学生の学びのプロセスに位置づけ、重要な役割を果たしていることが理解できる。とりわけ、本授業実践の時期は7月であったため、翌月に控えた教育実習に活かされる経験として、学生が意味づけをしていることがわかる。



【図4】 振り返りシートの記述のテキストマイニングによる分析（共起ネットワーク）

※ユーザーローカルAIテキストマイニングによる分析 (<https://textmining.userlocal.jp/>)

また、同様に振り返りシートの「③全体を通しての気づき」に記された学生の記述を共起ネットワーク図²で示すと、図4のように示される。ここにも教育実習や授業実践への意欲が表れており、異文化理解を取り入れた外国語（英語）授業の作り方に関する知見等、教職課程学生の学びの特徴が表出されている。さらには、「子どもたち」「児童」と連結する授業づくりや授業実践のヒントも共起ネットワークを構築している点も、特徴的である。

- 1 テキストマイニングでは「一般的な文書でよく出る単語は、重要ではないため、重み付けを軽くする」、一方「一般的な文書ではあまり出現しないけれど、調査対象の文書だけによく出現する単語は重視する」仕組みが取り入れられている。このような特徴語を抽出するためのロジックとして、一般的にTF-IDF法という統計処理がなされている。（AIテキストマイニング by ユーザーローカル〈userlocal.jp〉参照）
- 2 文章中に出現する単語の出現パターンが似たものを線で結んだ図、共起ネットワークは、出現数が多い語ほど大きく、共起、すなわち単語のセットが同時に出現する程度が強いほど太い線で描画される。

4. 総 括

以上、本稿では、留学生との交流を通じた外国語（英語）の授業が児童の学習意欲や異文化への関心向上にもたらした利点と、留学生と教員養成課程学生の協働的な授業づくりと授業実践によって生じた学びについて、多角的視点で探究した。小学校第5学年におけるWhat do you want to study?の単元の授業実践から、児童の意識調査と留学生、学生への振り返りシートを分析の対象とし、具体的に検討してきた。

検討の結果、留学生との交流を基盤とした協働的な授業の開発と実践は、児童にとっても、留学生にとっても、また教職課程学生にとっても有益な学びを創出させ、さらなる学びへの意欲の向上と自己自身の成長に寄与する可能性があることが明らかになった。

第一に、児童にとっては、言語環境の拡充と異文化理解の促進の観点から、学習意欲を高める効果が期待される。留学生との交流は、児童にとってリアルかつ自然な英語使用の環境を提供する。この環境拡充は、児童の英語をもっと聞き取りたい、話したい、理解したいという前向きな気持ちや学習意欲を向上させるものである。また、児童の記述の特徴に表されるように、留学生との交流は異なる文化間の理解を促進し、さらなる異文化への関心喚起につながる成果も認められる。そして、決して一元的ではない、留学生それぞれがもつ独自の体験や感情を伴う生の情報提供があったからこそ、児童により外国語や異文化に関心をもたせる契機となったとも考えられる。

言語は使用することでこそ発展し、理解が深まる。また、相手意識をもってコミュニケーションを図り、意思疎通が実現した時に学習の達成感を得て、次なる学習動機が生成される。したがって、単なる知識の蓄積だけでなく、言語を実際のコミュニケーションに応用できるような活動の設定が不可欠である。これにより、児童は言語を自らの意思疎通の手段として積極的に活用し、学びの喜びを感じることができよう。

第二に、授業提供側の留学生と学生にとっても、多様な気づきと学びをもたらす、教育効果が得られる点である。留学生にとっては、日本人学生そして日本人児童との相互交流により、相手が自国文化へ関心を示す姿の体感とともに、自国理解の深まりや自己肯定感や誇り等、情操面に好影響を与えることが明らかになった。自らが児童に提示する自国の文化や自身の小学校時代の思い出を日本との比較の視座から語ることで、内省が促され、日本における留学生としての自己認識や留学生活への価値づけの強化につながっている。

他方、教職課程学生にとっては、留学生との交流を通じた英語の授業開発の過程において、異文化理解・国際理解が促進されるとともに、異文化コミュニケーションの経験も蓄積され、授業者としての資質・能力の養成につながる。授業開発、指導計画の立案や練りあげ、資料やワークシートの考案等を一通り経験し実践を積むことにより、授業力育成に資する。また、児童が留学生との交流を通して興味津々で楽しそうに学ぶ姿を目の当たりにしたことで、外国語学習の意義や異文化理解の重要性を再確認し、将来の自分の姿を想像し、展望をもつことにもつながったようである。以上、本事例の総合的検討から、留学生との協働による小学校外国語の授業は、児童にとってはもちろん、留学生、教職課程学生にとっても有益であることが示唆された。

ここで看過すべきではないのは、「協働」に起因する多面的な成果も存在する点である。留学生による生きた情報提供に対して、学生が児童の発達段階を踏まえた理解能力を考慮し、既習事項のレベルを鑑みながら補足説明したり意味づけしたり、理解可能な表現に言い換えようとしたことで、授業の有効性を高め、学習効果の向上に寄与したと考えられる。それは、学生にとっても容易なことではなかったものの、学生の授業者としての力量形成につながっていると考えられる。このことは、以下の学生の記述からも裏付けられる。

「小学5年生は、思っていたよりも英語の既習事項が少ないことに気がついた。教師が話してリピートさせたり、今回のように教材または板書に使いそうな英文を用意して、必要に応じて使っていけるようにするなどの支援を細かくやってあげることが大切だと感じた」「留学生の英語は流暢でスピードが早く、内容を理

解できるか心配だったが、聞き取れた英単語をもとに言っている内容の理解を促すことができたのでよかった。一方で子どもたちにとって知らない英単語が出てきたときの対応に迷った。日本語で補足する前にこちらで簡単な英語に言い換えることができれば英語の学習ができてよかったと思うが、それがうまくできなかった。児童がさらに気になると感じている部分を引き出すことができれば、知りたいという意欲につなげることができたと思うし、その場で児童に簡単な英語を即座に提示できれば、さらなるコミュニケーションにつなげることができたと思う」。学生の振り返りシートからは、児童が楽しいと感じられるように、また留学生と活発な英語コミュニケーション活動が展開できるように思案し、児童の学習支援に努める様々な姿が看取でき、留学生と協働したからこそ創出された指導上の学びがあることがわかる。

もちろん、上述の多様な有効性は単発の実践によって確定できるものではない。また、平素とは異なる雰囲気による特別観や気持ちの高揚が与える影響を考慮しなければならない。しかしながら、異文化理解や国際交流のチャンネルを機能させることにより、「教科」として与えられた受動的な「学習」としてではなく、より能動的に学習へ向かう姿勢の涵養や、児童の外国語学習への動機づけに肯定的な作用を生み出す可能性は認められる。

2020年度以降、小学校外国語の早期化・教科化に伴い、激動する小学校外国語教育は新たな局面を迎えている。より効果的な授業や指導のあり方が模索されている試行錯誤の渦中において、様々な実践研究が日々更新されている現在、挑戦的な試みや試行的実践についても記録をとり、実践事例を検証し成果や課題、問題意識を蓄積していくことは、その領域の発展において重要な意味を帯びる。留学生を活用した外国語の授業は、供給が安定的でないものの、外国語教育において時機をみて適切に運用されれば、児童の好奇心を刺激し、学習意欲を高める可能性がある。留学生と教職課程の学生が協働した小学校外国語の授業開発と実践は、まだ発展途上の段階である。今後も授業開発、指導計画立案、実践、検証、評価、そして必要に応じた再検討と修正のサイクルを継続し、その可能性を追求していくことが望まれる。

引用文献

- 東優也 (2023) 「小学校外国語教育の充実におけるグローバル教育の役割—グローバル時代に求められるコミュニケーション能力の育成のために—」『グローバル教育』25, 3-18.
- 阿部始子 (2020) 「国際理解教育を取り入れた小学校外国語科の授業—児童の学びの広がり相互文化的コミュニケーション能力に焦点を当てた実践研究—」『小学校英語教育学会誌 *JES Journal*』20, 68-83.
- 岡朋哉・渡辺楓・阪東哲也・長野仁志・石坂広樹 (2021) 「小学校外国語におけるオンライン会議システムを活用した異文化交流に対する意欲を促進させる実践：留学生に自分の考えや気持ちを伝える言語活動に着目して」『鳴門教育大学情報教育ジャーナル』18, 15-20.
- 小林翔・古屋雄一郎・中川右成 (2021) 「小学校児童のスピーキング力向上とコミュニケーションをしようとする意思の育成を目指したビデオ通話の実践」『小学校英語教育学会誌 *JES Journal*』21, 4-19.
- 産経ニュース (2017) 「小6の約3割が英語嫌いに」〈<https://www.sankei.com/article/20170522-6PPJFVXJIZNZ3NMN7Q4RSTD5OE/>〉2023年11月27日アクセス確認
- 東京書籍株式会社 (2021) 『NEW HORIZON Elementary English course 5 教師用指導書 研究編』
- 寺沢拓敬 (2021) 「現代社会における英語」酒井英樹・滝沢雄一・亙理陽一編著『小学校で英語を教えるためのミニマム・エッセンシャルズ』三省堂, pp.141-153.
- 中村香・阿部始子・青柳有季・大里信子・萩原真也・澤井亜美・林正太 (2021) 「小中英語教育における連携カリキュラムの開発：これまでの留学生との交流活動の実践の検討」『東京学芸大学附属学校研究紀要』48, 31-48.
- 中村香・阿部始子・青柳有季・大里信子・萩原真也・澤井亜美・林正太 (2022) 「小中外国語教育における連携カリキュラムの開発—留学生との交流の実践を通しての児童生徒の学びと言語の系統性—」『東京学芸大学附属学校研究紀要』49, 19-36.
- 村野井仁 (2006) 『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』大修館書店
- 文部科学省 (2016) 「教育課程部会 外国語ワーキンググループにおける審議の取りまとめについて」

文部科学省 (2017) 『小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説外国語活動・外国語編』

米倉智久 (2017) 「子どもたちの思いを実現する小学校外国語活動の単元開発: 「留学生交流会」を通して」『広島大学附属三原学校園研究紀要』 7, 141-146.

Barany, L. K. (2011) Language Awareness, Intercultural Awareness and Communicative Language Teaching : Towards Language Education. *International Journal of Arts and Sciences*, 4(4), 158-181.

Gashi, L. (2021) Intercultural Awareness Through English Language Teaching : The Case of Kosovo. *Interchange*, 52, 357-375.

Krashen, S.D. (1985) *The input hypothesis : Issues and implications*. London : Longman.

謝 辞


実践の場を提供して下さったA校の先生方と、アンケートにご協力いただいた児童に深謝の意を表します。

また、本稿に記載した授業実践はゼミ活動の一環として実施し、授業案の作成および実践は研究室所属の田代桂大(3年)がリーダーとなり、ゼミ生(3年生)が中心となって行いました。学生の努力と協力で謝意を表します。そして、活動に協力をして下さった留学生に、謝意を表します。なお、本稿は関係学生の了承を得て執筆し、内容についても確認を行ったことを付記します。

付 記

本実践研究は、公益財団法人中島記念国際交流財団助成による「2023年度留学生地域交流事業」の支援を受けたものです。

資 料 (オリジナル教材 留学生出身国の時間割とワークシートの例 (マレーシア))



Malaysia

Name _____



学校での一日の流れはどうか？

◎Time Table!

	Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday
1 7:30~ 8:30	science	Malay	math	Malay	P.E
2 8:30~ 9:30	Malay	science	Islamic Education	Arts and craft	English
3 10:00 ~ 11:00	math	Islamic Education	English	Science	math
5 11:00 ~ 12:00	ICT	music	science	ICT	Islamic Education
6 13:00 ~ 14:00	English	Arabic	Malay	math	

いつ、どんな行事があるのかな？

気づいたことを自由に書いてみよう！

(函館校准教授)